Lucie Rie: Elegant Vessels Fusing East and West

ルーシー・リー展ー東西をつなぐ優美のうつわー

Lucie Rie

2026. 7. 4 Sat. ー 9. 13 Sun.

開館時間｜10:00–18:00（入館は閉館の30分前まで）
休館日｜毎週月曜日　＊ただし7月20日（月）は開館、7月21日（火）は休館
Hours｜10AM–6PM (Last admission at 5:30PM)
Closed｜Mondays (except July 20), July 21

主催｜公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都庭園美術館、東京新聞
企画協力｜国立工芸館　特別協力｜井内コレクション、京都国立近代美術館
協賛｜DNP大日本印刷　年間協賛｜戸田建設株式会社、ブルームバーグ Bloomberg　Van Cleef & Arpels

日時指定
予約制
Timed Entry
System

観覧料｜一般1,400（1,120）円、大学生（専修・各種専門学校含む）1,120（890）円、高校生および65歳以上700（560）円

＊（　）内は20名以上の団体料金／中学生以下は無料（予約不要）／
身体障害者手帳・愛の手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者2名は無料（ミライロID含む・予約不要）／
教育活動として教師が引率する都内の小・中・高校生および教師は無料（事前申請が必要）／第3水曜日（シルバーデー）は65歳以上の方は無料（予約不要）
＊本展は**日時指定予約制**です。ご来館前に当館ウェブサイトよりチケットをご購入ください。
＊7月29日（水）・8月5日（水）はフラットデー開催日のため、通常よりも入場者数を制限します。
チケットに関する最新情報は当館ウェブサイトをご確認ください。

〒108-0071 東京都港区白金台5-21-9　お問い合わせ｜050-5541-8600（ハローダイヤル）
5-21-9, Shirokanedai, Minato-ku, Tokyo　Tel +81(0)50 5541 8600
URL｜www.teien-art-museum.ne.jp　SNS｜@teienartmuseum
アクセス｜〔目黒駅〕JR山手線 東口／東急目黒線 正面口より徒歩7分、〔白金台駅〕都営三田線／東京メトロ南北線 1番出口より徒歩6分

東京都
庭園美術館
TOKYO METROPOLITAN
TEIEN ART MUSEUM

ルーシー・リー《青釉鉢》1980年頃　井内コレクション（国立工芸館寄託）撮影：河野幸人

各位

日頃より東京都庭園美術館をお引き立ていただき誠にありがとうございます。
当館では、2026年7月4日（土）～9月13日（日）の会期で
「ルーシー・リー展　―東西をつなぐ優美のうつわ―」を開催いたします。
本展は、20世紀を代表するイギリスの陶芸家ルーシー・リー（1902-1995）の作品を、彼女と交流のあった作家たちの作品とあわせて紹介する展覧会です。ぜひ貴媒体にて本展をご紹介いただけますよう、お願い申し上げます。

展覧会概要

20世紀を代表するイギリスの陶芸家ルーシー・リー（1902-1995）の、国内では約10年ぶりとなる回顧展です。
オーストリアのウィーンで生まれたルーシー・リーは、ウィーン工芸美術学校で轆轤（ろくろ）を用いた制作に魅了され、陶芸の道へと進みました。作家としての地位を確立しながらも、1938年に戦争で亡命を余儀なくされると、作陶の場をイギリスのロンドンへ移します。
ろくろから生み出される優雅なフォルム、象嵌や掻き落とし技法による独創的な文様、そして釉薬によって生み出される豊かな色彩など、彼女の作品がもつ繊細さと凛とした佇まいは、多くの人々を魅了し続けています。
本展では、ウィーンで出会ったヨーゼフ・ホフマンや、ロンドン時代に知り合ったバーナード・リーチ、ハンス・コパーなど、リーと交流のあった作家たちの作品をあわせて展示し、日本を中心とした東洋のやきものとの関係性も見直します。制作初期から円熟期まで、リーが出会った場所、人、もの、時代背景を交えながら作品を紐解くことで、その造形の源泉や作品に表された信念に迫ります。

ルーシー・リー《青釉鉢》　1980年頃
井内コレクション（国立工芸館寄託）
撮影：品野 墨

みどころ

1　国内の貴重なルーシー・リー作品が集結

日本においてルーシー・リーの作品は、1989年に草月会館の展覧会で本格的に紹介され、2010年、2015年の大規模な展覧会を経て、広く親しまれています。本展では、国立工芸館（金沢）に寄託された井内コレクションをはじめとして、国内のルーシー・リーの作品が一堂に会します。日本では約10年ぶりとなる回顧展の機会をお見逃しなく！

2　ルーシー・リーが交流した関連作家の作品も展示

ウィーンで出会ったヨーゼフ・ホフマンや、イギリスで知り合ったバーナード・リーチ、ハンス・コパー、濱田庄司など、リーと交流のあった作家たちの作品もご紹介。洋の東西が入り混じる背景のもと制作されたルーシー・リーの作品を、彼女が生きた時代や出会った人から紐解きます。

3　東京都庭園美術館ならではの展示空間で、ルーシー・リーの造形世界にひたる

東京都庭園美術館の本館は、1933年に朝香宮家の自邸として竣工したアール・デコ建築です。うつわ本来の魅力を引き出す邸宅空間で、ルーシー・リーの繊細かつ優美な造形世界と、旧朝香宮邸の建築との対話をお楽しみください。

ルーシー・リー《熔岩釉鉢》1980年頃
井内コレクション（国立工芸館寄託）
撮影：品野 墨

ルーシー・リー《マンガン釉線文鉢》1970年頃
井内コレクション（国立工芸館寄託）
撮影：品野 墨

展示構成

１章　ウィーンに生まれて

ルーシー・リー（旧姓ゴンペルツ）は1902年、裕福なユダヤ系家庭のもとに生まれます。ウィーン工芸美術学校に入学し、ミヒャエル・ポヴォルニーに陶芸を学びました。リーが制作を始めた20世紀初頭のウィーンでは、生活全般に関わるあらゆる分野を「総合芸術」として実現する理想を掲げていた「ウィーン工房」の作家たちが活躍していました。建築、家具、衣服から日用品に至るまで、上質な手仕事と機能的で実用的なデザインを結びつけようとした作品が次々と生み出されていたのです。
本章では、ウィーン工房の創設者のひとりであるヨーゼフ・ホフマンをはじめ、同時代に活躍した作家の作品、またそのような時代の空気を吸収しながら制作していたリーの初期作品を紹介します。

左：ルーシー・リー《鉢》1926年頃 個人蔵 撮影：野村知也
右：上野リチ・リックス(装飾)／ヨーゼフ・ホフマン(形)《リキュールグラス》
1929年［1917年(形)／1929年(装飾)］ 京都国立近代美術館蔵

２章　ロンドンでの出会い

1938年、ルーシー・リーはナチスの迫害を逃れるためロンドンへと渡り、新たな環境での生活を始めます。この頃、イギリス陶芸界の中心的な役割を担っていた、バーナード・リーチと出会いました。また、戦時中に生計を立てるため、リーは陶製ボタンの制作に携わります。ボタン制作を手伝いながら陶芸を学ぶためにリーの工房を訪れた青年ハンス・コパーは、彼女の陶芸制作を大きく後押ししました。本章では、リーのロンドン時代の作品に加え、渡英後の彼女に大きな影響を与えたリーチとコパーの作品を紹介します。

左上：バーナード・リーチ《蛸図大皿》1925年
国立工芸館蔵 撮影：アローアートワークス
©The Bernard Leach Family. All rights reserved, DACS & JASPAR 2026 C5380
右上：ルーシー・リー《ボタン》(一部) 1940-50年代
公益財団法人岡田文化財団パラミタミュージアム蔵
左下：ルーシー・リー《コーヒー・セット》 1960年頃
国立工芸館蔵 撮影：エス・アンド・ティ フォト
右下：ハンス・コパー《キクラデス・フォーム》1972年
国立工芸館蔵 撮影：アローアートワークス

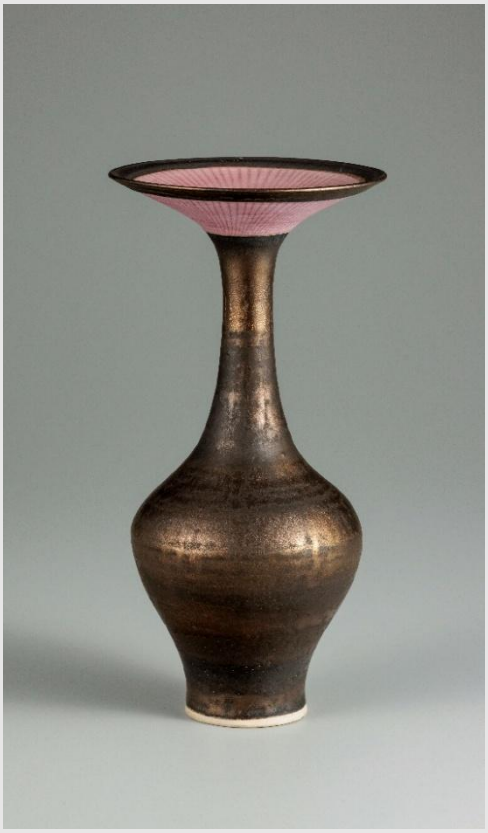
３章　東洋との出会い

リーが渡英した当時、バーナード・リーチをリーダーとするスタジオ・ポタリーの陶芸家たちは、イギリスにおける陶芸表現の可能性を探るなかで、日本、中国、朝鮮などの東洋陶磁を参考にしていました。1952年にイギリスで開催されたダーティントン国際工芸家会議には、日本から柳宗悦と濱田庄司が招聘され、リーも彼らと交友を深めます。本章では、リーチや濱田らの作品とともに、リーと東洋との関わりを紹介します。

左：濱田庄司《塩釉鉄砂抜絵注瓶》1965-70年頃 国立工芸館蔵 撮影：下瀬信雄　©株式会社濱田窯
右：ルーシー・リー《白釉鎬文花瓶》1976年頃 国立工芸館蔵 撮影：品野 墨

４章　自らのスタイルへ―陶芸家ルーシー・リー―

本章では、リーが1970年以降に制作した鉢と花器を紹介します。小さな高台を特徴とする優雅なフォルム、マンガン釉や掻き落とし技法を用いた文様など、現在私たちが彼女の作風として知っている様式は、この頃に確立されました。1989年に草月会館で個展が開催されたことをきっかけに、日本でもルーシー・リーの人気は高まりました。釉薬と形態、そして装飾が一体となって洗練された印象を生み出す彼女の作品をご覧ください。



左上：ルーシー・リー《白釉ピンク線文鉢》1984年頃
　　井内コレクション（国立工芸館寄託）　撮影：野村知也
右上：ルーシー・リー《練り込み花器》1980年頃
　　井内コレクション（国立工芸館寄託）　撮影：品野 塁
左下：ルーシー・リー《ピンク象嵌小鉢》1975-79年頃
　　国立工芸館蔵 撮影：アローアートワークス
右下：ルーシー・リー《ブロンズ釉花器》1980年頃
　　井内コレクション（国立工芸館寄託）　撮影：品野 塁

展覧会情報

展覧会名	ルーシー・リー展―東西をつなぐ優美のうつわ―
英文タイトル	Lucie Rie: Elegant Vessels Fusing East and West
会期	2026年7月4日（土）－9月13日（日）
開館時間	10：00 － 18：00（入館は閉館の30分前まで） ＊8月7日、14日、21日、28日（金）は夜間特別開館のため21:00まで開館（入館は閉館の30分前まで）
休館日	毎週月曜日　※ただし7月20日（月）は開館、7月21日（火）は休館
会場	東京都庭園美術館（本館+新館）
観覧料	一般＝1,400円（1,120円）／大学生（専修・各種専門学校含む）＝1,120円（890円）／高校生、65歳以上＝700円（560円） ※本展は日時指定予約制です。 ※中学生以下は無料 ※（　）内は団体料金。団体は20名以上（事前申請が必要） ※身体障害者手帳・愛の手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者2名は無料（ミライロID含む） ※教育活動として教師が引率する都内の小・中・高校生および教師は無料（事前申請が必要） ※第3水曜日（シルバーデー）は65歳以上の方は無料 ※7月29日（水）・8月5日（水）はフラットデー開催日のため通常よりも入場者数を制限します。
主催	東京都庭園美術館（公益財団法人東京都歴史文化財団）、東京新聞
企画協力	国立工芸館
特別協力	井内コレクション、京都国立近代美術館
協賛	DNP大日本印刷
年間協賛	戸田建設株式会社、ブルームバーグ Bloomberg　Van Cleef & Arpels

会場情報

東京都庭園美術館｜東京都港区白金台5–21–9

［目黒駅］JR 山手線東口／東急目黒線正面口より徒歩7 分

［白金台駅］都営三田線／東京メトロ南北線1 番出口より徒歩6 分

TEL. 050-5541-8600（ハローダイヤル）03-3443-0201（代表）／ FAX. 03-3443-3228

Website　www.teien-art-museum.ne.jp

Follow us on Facebook, X, Instagram　@teienartmuseum

会期中のプログラム

●講演会

~~**「東西をつなぐルーシー・リー」**~~

~~本展の監修者が、ルーシー・リーの生涯と作品、そして東洋のやきものとの結びつきについて語ります。~~

~~講師｜岩井美恵子（国立工芸館工芸課長・本展監修者）~~

~~日時｜2026年7月18日（土）14時－（約60分）~~

~~場所｜東京都庭園美術館　新館ギャラリー2~~

~~参加費｜無料（当日有効の展覧会チケットが必要）~~

~~定員｜80名（事前申込制・応募者多数の場合抽選）~~

~~サポート｜手話通訳・文字表示支援あり~~

~~※2026年6月18日（木）より、当館ウェブサイトからお申込み可能~~

→都合により、講師・日程ともに変更となりました。

「ルーシー・リーの作風の変遷―ウィーンからロンドンへ―」

長年ルーシー・リー作品を研究し、2010年と2015年の「ルーシー・リー展」の企画・監修を務めた金子氏が、リーの生きた時代や作品の造形について語ります。

講師｜金子賢治（茨城県陶芸美術館 館長）

日時｜2026年7月19日（日）14時－（約60分）

場所｜東京都庭園美術館　新館ギャラリー2

参加費｜無料（当日有効の展覧会チケットが必要）

定員｜80名（事前申込制・応募者多数の場合抽選）

サポート｜手話通訳・文字表示支援あり

※2026年6月19日（金）より、当館ウェブサイトからお申込み可能

「担当学芸員によるミニレクチャー」

本展担当学芸員が、ルーシー・リーの作品に初めて出会う方、展覧会の構成や見どころを短時間で知りたい方へむけて、展覧会や作品を楽しむポイントをご紹介します。

講師｜勝田琴絵（東京都庭園美術館 学芸員）

日時｜2026年7月31日（金）16時－、8月8日（土）14時－（各回とも約30分）

場所｜東京都庭園美術館　新館ギャラリー2

参加費｜無料（当日有効の展覧会チケットが必要）

定員｜80名（事前申込制・応募者多数の場合抽選）

※2026年6月30日（火）より、当館ウェブサイトからお申込み可能

会期中のプログラム

●ワークショップ

「陶製のボタンをつくろう」

ルーシー・リーの陶製ボタンをヒントに、オリジナルのボタンを作ってみましょう。

講師｜岡崎裕子（陶芸家）

日時｜2026年8月22日（土）11時30分－、14時30分－（各回とも約90分）

場所｜東京都庭園美術館　新館ギャラリー2

参加費｜無料（当日有効の展覧会チケットが必要）

対象｜小学校高学年以上

定員｜各回20名程度（事前申込制・応募者多数の場合抽選）

※2026年7月22日（水）より、当館ウェブサイトからお申込み可能

※作ったボタンは後日送付します。

●アクセスプログラム

「さわ会―さわっておしゃべり鑑賞会」

建物や作品に触れ、対話を通じて感じたことを共有する鑑賞会です。茶室「光華」でルーシー・リーの茶碗を手に取りながら、心に浮かんだことをおしゃべりしてみませんか。

企画｜半田こづえ（明治学院大学 非常勤講師）

日時｜2026年7月12日（日）

午前の会：10時30分ー12時30分　午後の会：14時30分ー16時30分

場所｜東京都庭園美術館　茶室「光華」

参加費｜無料（当日有効の展覧会チケットが必要）

対象｜中学生以上

定員｜各回6名程度（事前申込制・応募者多数の場合抽選）

※2026年5月12日（火）より、当館ウェブサイトからお申込み可能

会期中のプログラム

●フラットデー

東京都庭園美術館は、あらゆる人がフラットに安心して楽しめる環境づくりに取り組んでいます。フラットデーは入館者数を制限するため、ゆとりある環境で展覧会をお楽しみいただけます。

① ゆったり鑑賞日

障害がある方も、ない方も、美術館をゆっくり楽しみませんか？
多くの人で賑わう美術館に不安がある方も、普段よりもゆとりのある環境で鑑賞できる一日です。車椅子の方や介助等が必要な方も、安心してお過ごしいただけます。
＊本館内でベビーカーは利用できません。
日時　2026年7月29日（水）10時ー18時（最終入場17時30分）

② ベビーアワー

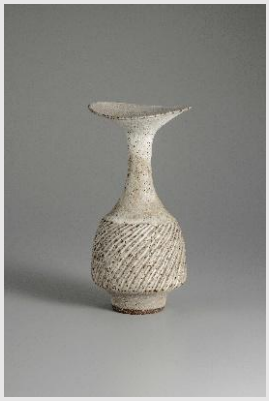
赤ちゃんと暮らすご家族のみなさんに気兼ねなく展覧会をご覧いただける時間です。普段はベビーカーを使うことができない本館も、ベビーカーのままご入館いただけます。
日時　2026年8月5日（水）10時ー15時（本館内でベビーカーを利用できる時間）

鑑賞ツアーを同時開催

フラットデー当日はアート・コミュニケータによる鑑賞ツアーも行います（事前申込制）。

撮影：大倉英揮（黒目写真館）

広報用画像



1	2	3	
4	5	6	
7	8	9	10
11	12	13	

広報用画像

1　ルーシー・リー《青釉鉢》1980年頃
　井内コレクション（国立工芸館寄託） 撮影：品野 墨
2　ルーシー・リー《熔岩釉鉢》1980年頃
　井内コレクション（国立工芸館寄託） 撮影：品野 墨
3　ルーシー・リー《マンガン釉線文鉢》1970年頃
　井内コレクション（国立工芸館寄託） 撮影：品野 墨
4　ルーシー・リー《鉢》1926年頃
　個人蔵　撮影：野村知也
5　上野リチ・リックス(装飾)／ヨーゼフ・ホフマン(形)《リキュールグラス》
　1929年［1917年(形)／1929年(装飾)］ 京都国立近代美術館蔵
6　ルーシー・リー《ボタン》(一部) 1940-50年代
　公益財団法人岡田文化財団パラミタミュージアム蔵
7　ルーシー・リー《コーヒー・セット》1960年頃
　国立工芸館蔵　撮影：エス・アンド・ティ フォト
8　ハンス・コパー《キクラデス・フォーム》1972年
　国立工芸館蔵　撮影：アローアートワークス
9　ルーシー・リー 《白釉鎬文花瓶》1976年頃
　国立工芸館蔵　撮影：品野 墨
10　ルーシー・リー《白釉ピンク線文鉢》1984年頃
　井内コレクション（国立工芸館寄託） 撮影：野村知也
11　ルーシー・リー《練り込み花器》1980年頃
　井内コレクション（国立工芸館寄託） 撮影：品野 墨
12　ルーシー・リー《ピンク象嵌小鉢》1975-79年頃
　国立工芸館蔵　撮影：アローアートワークス
13　ルーシー・リー《ブロンズ釉花器》1980年頃
　井内コレクション（国立工芸館寄託） 撮影：品野 墨

展覧会広報　お問い合わせ先
東京都庭園美術館　広報担当：中島（なかじま）、飯塚（いいづか）
TEL. 03-3443-0201　Mail press@teien-art-museum.ne.jp